

# 江戸期における農兵論の転回

—— 太宰春台と林子平 ——

折 原 裕

はしがき

第1節 太宰春台の容商的尚農論

第2節 林子平の海防的農兵論

おわりに

はしがき

江戸期における経済思想の展開の主役は、当時の知識階級としての武士たちであった。彼らは、同時に支配階級であったから、彼らが紡いだ経済思想は、政治的支配階級による経世済民の思想という性格を帯びることになった。つまり、彼らにとって、経済の問題は、政治の問題の一環であり、何よりもまず、経世済民という目標を達成すべき政策の問題であった。

ところで、江戸期の武士にとって最大の経済問題は、商品経済の発達に伴なう武士の窮乏化だった。兵農分離の結果、都市居住者となった武士は、知行地から上がる米の価格の低下と、都市生活に必要な物資の価格の上昇と、両面から商品経済に圧迫されていた。そこで、武士であった経済思想家の多くが、この問題を経世済民の中心に据えることになった。このようなわけで、経世思想の最大目標は武士の窮乏からの救済となり、経世済民は、その実しばしば、経世済士にすり替わったのである。

こうした江戸期の経世思想の、初期の形態が農兵論である。農兵論とは、武士を知行地に帰農させ、武士の消費支出を押さえることによって、武士を窮乏から救済しようという議論である。この農兵論は、貴穀賤金や農本商末といった、当時原則をなしていた思考様式に沿ったもので、商品経済を否認するという方向性を持っていた。

これに対して、商品経済を是認する方向性を持っていたのが、重商主義論である。重商主義論とは、藩営商業などを通じて、武士も商品経済から積極的に利益を引き出すべきであり、その利益によって武士を窮乏から救済しようと主張する議論だった。

農兵論の代表的な論者としては、熊沢蕃山や荻生徂徠を、重商主義論の代表的な論者としては、海保青陵、本多利明、佐藤信淵、横井小楠を、あげることができる。<sup>1)</sup>

農兵論が商品経済の発達とともに現実性を失なうのに対して、重商主義論は、商品経済の発達とともに現実性を増す関係になるから、江戸期の初期から中期、そして後期へと時代が進むにしたがって、農兵論はすたれ、重商主義論にとって代わられることになるのは当然と言ってよい。すなわち、きわめて大まかに言うと、江戸期の経世論の展開の主流は、農兵論から重商主義論へと移行してゆく流れということになる。

しかし、重商主義論は、貴穀賤金や農本商末という、当時の原則的思考様式に反するものであったから、商品経済の発達によって、オートマテックに重商主義論への移行がなされるというものではない。農兵論から重商主義論への移行には、いくばくかの思想的な葛藤が必要だった。小稿では、そうした移行の転回点に立つと目される、太宰春台と林子平の経世論について、簡単に見てゆくことにしたい。

## 第1節 太宰春台の容商的尚農論

## 1

太宰春台は、延宝8年（1680年）、信州飯田に武士の次男として生まれた。<sup>2)</sup>父太宰言辰〔のぶとき〕は、加賀の平手家から、飯田の太宰家に養子として入った人で、飯田藩の鉄砲組頭を勤め、200石を食んでいた。父言辰から4代さかのぼった平手政秀は、織田信長の守り役を勤め、信長の非行を諫言して自刃した人物として名高い。後に太宰春台が『経済録』の序文に、自らが平手政秀の子孫である旨を記しているのも、こうした言わば名門の出自を誇ったものであろう。春台の、圭角と評される、とかく円満さに欠ける人格は、このような出自への誇りと、長年にわたる不遇と、両者のへだたりに助長されたものかも知れない。

春台が8歳の秋（数え、以下同じ）、父が藩主の不興を買って飯田藩を追われたため、翌年の元禄元年、一家は江戸に出て、浪人生活に入った。ときに、父は53歳、母は33歳、兄は17歳であった。江戸での少年時代、春台は、和歌をよくする父母の手ほどきで、多くの和歌を詠んだ。14歳の頃からは、和歌をやめて、漢詩に専念するが、和歌では所詮公家にはかなわず、出世に役立たないと考えたからと伝えられる。高齢の父が仕官をあきらめ、病弱の兄の仕官が長続きしなかったため、一家の台所は苦しかったらしい。

春台は、15歳のとき但馬出石藩に出仕するが、病気を理由に致仕を再三願った。この頃春台は、将来への不安から、一種のノイローゼに陥っていたとも言われる。出石藩は春台の致仕を許さなかったが、母を亡くした21歳のとき、春台は、勝手に出石藩を辞めてしまう。これが藩主の怒りに触れて、春台は明るる年より10年間他家への出仕を禁ずる処分を受けた。

25歳のとき、健康を回復した春台は、京都へ出た。以来、京都を中心

に、丹波や大坂などを転々とし、僅かに医業に依りながら、貧しい生活を送った。かねてから朱子学に疑問を抱いていた春台は、伊藤仁斎の講義に出たりもしていたらしい。30歳のとき、大坂で妻を迎え、処分の解けた32歳のとき、江戸に舞い戻った。

江戸に戻った春台は、荻生徂徠の門下に入った。入門に際して徂徠は、春台の詩文はすでに出来上がっているのだから、経学を修めるようにと要求したという。服部南郭の詩文、太宰春台の経学、と並び称されるにいたる、徂徠門下生両雄の一人としての春台の方向は、このときに定まったと言ってよい。

春台は、徂徠の門下に入ったその年、下総生実〔おいみ〕藩に微禄で出仕したが、4年後には退仕し、以後一生仕官することはなかった。春台は、仕官しないで済むのなら仕官しないのが一番と考えていたし、200石以上の俸禄でなければ仕官する甲斐がないとも考えていた。だから、彼は仕官の道を、半ば自らが閉ざしていたとも言えよう。

春台の生活の糧は、彼が江戸小石川に開いた私塾柴芝園〔ししえん〕の束脩に大部分を依存し、春台の暮らしが貧しさから抜け出すことはなかった。彼の学者としての力量が世間に知られるようになると、大名たちの中には春台に扶持米を贈る者も何人か現われたが、相手が誰であれ、師弟の礼に厳しく、非礼があれば直言をもって咎める春台は、こうした大名たちとの関係を長続きさせることができず、大名たちからの扶持米も結局のところすべて辞退することになる。

春台は、書の誤りを正すに極めて厳密で、私塾柴芝園の師としても、門人の書に誤りがあれば容赦しなかった。柴芝園からは、多くの門弟が巣立ったが、その中には海保青陵の父の師である大塩与右衛門もいた。春台の著作の多くは、富商でもあった、この大塩与右衛門の手によって出版されている。

春台の代表作である『経済録』が脱稿したとき、将軍徳川吉宗の御側役

の八田久通（伊勢八田1万石の藩主）から、『経済録』の草稿を将軍に献ずるよう、仲介者を通じて要請があったが、春台はこの要請を断っている。表向きの理由は、字が乱雑ということだったが、老中のような幕府高官ではなく、御側役からの要請であったことが気に入らなかったらしい。ともあれ、春台の『経済録』は、師の徂徠が没した翌年に刊行された。春台50歳、徂徠の『政談』が世に出て4年後のことであった。春台の『経済録』は、当時徂徠の『政談』と並んで広く読まれた本だった。

春台は、最初の妻を早くに亡くし、二度目の妻も病弱であったため、子供に恵まれなかった。晩年に養子を迎えたが、この養子の血筋もやがて絶えてしまうので、春台の家系は続かなかった。春台は、68歳で世を去ったが、その死因は胃がんと推定されている。

## 2

太宰春台は、『経済録』巻の一「経済総論」の冒頭を、次のような言葉で書き始めている。「およそ天下国家を治むるを経済と云う。世を経して民を済〔すく〕うと云う義なり。<sup>3)</sup>」言うまでもなく、ここに見られるのは、政治権力による経世済民という経済思想の、明瞭な課題設定である。

春台のユニークなところは、こうした課題に答えるためには、経済認識の言うならば革新がなされる必要があると主張する点にある。春台は言う。「およそ経済を論ずる者、知るべきこと四つ有り。一つには時を知るべし。二つには理を知るべし。三つには勢を知るべし。四つには人情を知るべし。<sup>4)</sup>」

春台の言う「時」とは、たとえば中国と日本との歴史の相違ということである。そうした相違を十分に認識しないで、中国のいにしえの聖人の説く道を、そのままに日本に当てはめようとしてもうまくはゆかない。「一概に古道を以て今に行なわんとすれば、時と齟齬して行なわれず<sup>5)</sup>」という

ことになるわけである。もっとも、だからと言って、「古道」がもはや用なしになったと、春台は考えてはいない。「古道」はなお有効であるが、「時」という制約によって、その有効性は条件付けられている、というのが春台の立場なのである。それゆえ、この『経済録』の段階ですでに、春台は、いついかなる場合も「古道」を絶対の基準とする、師の荻生徂徠の「古学」から、ある程度離脱して、「古道」を相対化していることになる。

次いで、「二つに理を知るとは、理は道理の理にあらず、物理の理なり<sup>6)</sup>」と春台は述べる。つまり、ここで言う「理」とは、精神的なあるいは道徳的な理ではなく、物質的なあるいは自然的な理のことである。「理」とは、たとえるなら木の木目のようなものであって、木目に逆らって木を削ろうとしてもうまくいかない。それと同じように、「天下の事にも、また必ずその理あり。政をなして若しその理に逆らえば、大事も小事も決して行なわれず<sup>7)</sup>」と春台は考えるのである。ここでも、春台は、徂徠に顕著な原則的思考から一步進んで、より実際的な思考に足を踏み入れようとしている。

さらに、「三つに勢を知るとは、勢は事の上に在りて、常理の外なるものなり<sup>8)</sup>」と春台は言う。この言葉の含意するところは、「勢」というものは、「理」の外部にあって、「理」の作用を攪乱する要素となるということである。たとえば、火に水をかければ火が消えるのが「理」であるけれども、火の「勢」が強く、水の「勢」が弱ければ、火は消えない。だから、天下を治めるにあたっては、「理」と「勢」の双方を知る必要がある。「理の達せざる所をば、勢を以てこれを達し、勢の行なわれざる所は、理を以てこれを行ない、理を以て勢を主どり、勢を以て理をたすけ、理勢相なして、ふたつながらその用を尽くす。これ政治の要術なり。<sup>9)</sup>」こう春台は主張するのである。やはり、ここでも春台は、より実際的であろうと努めていることになる。

最後に、四つ目の人情については、「人情を知るとは、天下の人の実情を

知るなり<sup>10)</sup>」と春台は言う。実情とは、「好悪・苦楽・憂喜の類い<sup>11)</sup>」であるが、情に実の字を添えるのは、情が人の天性から生ずるもので、偽りがな  
いことを表わしている。だから、情を無視して政治は行なえない。「およそ  
政事を施して、人情にかなえば、民従い易し。人情にもとれば民従わず。  
人情にかなうとは、人の好み楽しみ喜ぶことを行なうなり。人情にもとる  
とは、人のにくみ苦しみ憂うることを行なうなり。」<sup>12)</sup>このように、春台は  
述べるのである。しかも、春台が注意するように、人情は、書物によって  
学び難いという性質を持っている。「およそ人情を知ること、物理を知る  
よりも難し。物理は、善く書を読み学問したる者はこれを知る。人情は書  
を読み学問したるばかりにても知られず。」<sup>13)</sup>したがって、書物から学ぶに  
とどまらず、人々の実生活と交わることによって、人情を知る努力が必要  
なのだ、と春台は主張するのである。ここでも、やはり春台は、既存の学  
問、既知の原理を越えて、より実際的な認識の獲得を目指しているわけ  
である。

以上のように、春台は、経済を論ずるには、すぐれて実際的な思考  
がなされるべきだとして、経済認識の言わば革新の必要性を説くので  
ある。荻生徂徠と比較するなら、小島康敬氏の述べられるように、「徂  
徠が〔・・・〕『今の世』がなお先王の礼楽刑政で治まるはずだ、という少  
なからぬ実感を持っていたのに対して、春台は〔・・・〕もはや先王の礼  
楽刑政の治術に対する信頼の絶対性をなくしてきている<sup>14)</sup>」という関係にな  
るわけでもある。

それでは、そうした経済認識の方法の問題は一応別として、春台が提示  
する、経済認識自体はいかなるものであったろうか。『経済録』の中で、直  
接経済に関する問題を集中的に取り扱った、巻の五「食貨」を全体として  
見ると、意外に原則的で、保守的な理解が目につくのである。たとえば、  
次の記述である。「天下を治むるに、穀を貴び貨を賤しむるは、いにしへの  
善政なり。先王の道なり。穀は民の食物なり。食は民の天なり。一日もな

くて叶わぬ物なり。貨とは金銀錢なり。金銀は勝れたる宝と、人ごとに思えども、飢えたる時、金銀を嚙んでは腹充たず。一碗の粥を啜れば死を免る。<sup>15)</sup>ここに表明されているのは、相も変わらぬ貴穀賤金思想と見る他ない。

そして、その貴穀賤金思想は、当然のように、農本商末思想と結び付くことになる。春台は、次のように言うのである。「民の業に本末ということあり。農を本業といい、工商賈を末業という。四民は国の宝にて、一つ欠いても国といわず。然れども農民少なければ、国の衣食乏しくなるゆえに、先王の治めには、殊に農を重んぜらる。農業はいたって艱難なることにて、終歳労苦して、しかも利潤少なく、嘉穀を食うことも能わぬゆえに、工商の労苦軽して、利潤多きを羨み、農より工商にうつる者多し。

〔・・・〕これによりて聖人の政には、天下の戸籍を正しくして、四民の家敷人別を度々改めて、農民より妄りに他の業にうつることを禁ずるなり。当代にはこの禁なきゆえに、工商の輩日々数多くなり、在々所々に偏満して〔・・・〕人の侈心を引き起こし、金銀の貨悉く賈人の蔵に納まる。嘆かわしきことにあらずや。<sup>16)</sup>この春台の発言には、農本商末思想にとかくつきものの、富商憎悪も見え隠れしている。

このような方向に議論を進めてゆくとき、春台が、一方で経済認識の革新の必要性を説きながらも、他方で反動的な復古主義にからめとられてゆく可能性は、大いにあったと言ってよい。しかし、実際には、春台は、師の荻生徂徠の農兵論のような、強度の復古主義には陥っていない。春台の場合も、「古道」や「先王の道」といった原則が尊重される限りにおいて、復古主義的な要素が付きまとうことになるが、概して春台の議論に含まれる復古主義は、いわゆるたてまえに過ぎず、政策としての具体像を欠くものに過ぎなかったのである。

なぜなら、春台の場合、「古道」や「先王の道」といった原則は、依然として尊重されるものの、それらの原則は、実際的な場面では相対化されて



把握されるからである。すなわち、春台の思考の中では、貴穀賤金や農本商末は、そういった相対化を許容する原則に他ならないのであって、実際的な場面に直接に適用しうる原則ではもはやない。だからまた、春台の場合は、貴穀賤金や農本商末が、復古主義的に、商品経済の否認や農兵論の主張に、直結しないことにもなる。春台の経済論は、貴穀賤金や農本商末を掲げる以上、不可避的に尚農論の伝統の内部にとどまるものではあるが、それは、尚農論ではあっても、進んで農兵論とはならない関連になるのである。

### 3

『経済録』での春台の経済論においては、経済認識が革新されるべき必要性が述べられながらも、彼自身が提示した経済認識は、大体において独自性に欠け、原則的で保守的なものだった。それは、商品経済の否認や農兵論といった、復古主義的反動に陥ることを避けつつも、経世済民という課題を達成する新たな具体策を欠いていた。

一方、『経済録』に遅れること15年、春台65歳のときに刊行された『経済録拾遺』では、春台はもっと大胆に、彼独自の思考を展開してみせる。『経済録拾遺』では、貴穀賤金思想や農本商末思想は、たてまえとしても影をひそめ、それゆえまた、『経済録』には含まれていた復古主義も払拭されている。そこでは、商品経済を否認するどころか、商品経済を積極的に利用して、経世済民の実をあげることが、具体的に説かれるのである。

『経済録拾遺』巻頭には、次の言葉がある。「近来諸侯大小と無く、国用不足して貧困すること甚だし。家臣の禄奉を借りること、少なきは十分の一、多きは十分の五六なり。それにて足らざれば、国民より金を出さしめて急を救う。なお足らざれば、江戸・京・大坂の富商大賈の金を借りること、年々にやまず。借りるのみにて還すことまれなれば、子〔利息〕また

子を生みて、宿債増多すること幾倍ということを知らず。」<sup>17)</sup>ここで、春台は、経世済民という『経済録』で述べられたのと同じ課題を、より具体的に述べているわけである。そして、ここでの経世済民が、その実、当時の武士による経済思想の通例と同様、経世済士にすり替わっていることも、明らかである。つまり、「春台の経済思想は、武家政治本位の経済政策論的傾向が強い」<sup>18)</sup>のは、言うならば当然であるが、その当然の春台の本音が、ここ『経済録拾遺』では、ストレートに表現されているのである。

ところで、改めて述べるまでもなく、熊沢蕃山や荻生徂徠の場合は、この経世済士という課題が、武士の帰農という、商品経済から自然経済への復帰を主張させる関係になった。経世済士で救済されるべき武士の窮乏化は、商品経済の発展に起因するものであったから、蕃山や徂徠が、商品経済の発展を阻止することによって、経世済士を達成しようと考えたのは、それ自体奇異なことではない。そしてまた、武士の帰農は、貴穀賤金や農本商末という原則にもよくマッチしたのである。

しかし、もちろん、そうした蕃山や徂徠の農兵論は、果たして武士の帰農が可能かという、困難な問題に逢着せざるをえない。その困難さは、商品経済の発展が進めば進むほど、つまり武士の窮乏化が深刻になればなるほど増す、という裏腹な関係にある。だからこそ、農兵論は、商品経済の発展が進むとともに、現実性を失ない、やがて重商主義論に取って代わられることにもなるわけである。

もともと、農兵論の論理構造が、武士の本業以外への従事を勧めるものである以上、武士が、農業ばかりではなく、商業や工業へも従事すべきだとすれば、農兵論が容易に重商主義論に転換しうるという点にも、注意しておく必要がある。

だが、しかし、そのような、農兵論から重商主義論への転換は、明らかに原則からの逸脱を意味するのである。これに類する逸脱をあえて敢行したのが、春台の『経済録拾遺』であった。春台は言う。「当代は天下の人、

貴賤と無く、皆江戸に集まりて、旅客なるゆえに、金銀にて万事の用を足すこと習俗になりて〔・・・〕されば今の世は、米穀布帛ありても、金銀乏しければ、世に立ちがたし。小民の賤しき者のみにあらず、士大夫以上、諸侯国君も皆然なり。然れば今の世は、禄ある士大夫も、国君も皆商賈の如く、偏に金銀にて、万事の用を足すゆえに、如何にもして金銀を手に入る計をなす。これ今の急務と見ゆるなり。金銀を手に入る術は、<sup>19)</sup> 買売より近きこと無し。」

上では、春台は、武士をはじめとする都市居住者が、商品経済のただ中<sup>20)</sup> にあって抜き差しならない状況を、徂徠の「旅宿」<sup>20)</sup> によく似た、「旅客」という言葉で表現している。しかし、徂徠が「旅宿」を原則に反する異常事態と捉え、原則への回帰を主張したのに対して、春台は、原則に拘泥しないで、「旅客」への適応を主張しているのである。両者の相違は、思考の枠組みにあるのではなく、原則の理解と、原則が当てはめられるべき状況認識にあると考えてよいだろう。そして、春台が徂徠と異なる方向に思考を展開することができたのも、彼が『経済録』以来、原則に対する柔軟な姿勢を前提に、経済認識の革新を志向してきた成果と言ってよい。

こうして、春台は、尚農の原則に立ちながらも、後の重商主義論への先鞭をつけることになった。春台の場合、尚農の原則が明確に放棄されない限りにおいて、彼の議論の全体を重商主義論と特徴付けてよいかどうかは、微妙なところであろう。<sup>21)</sup> そこで、小論では仮に、春台の経済論を、師徂徠の経済論を「抑商的農兵論」と呼んだ<sup>22)</sup> 対比において、「容商的尚農論」と呼んでおくことにしよう。

春台は、武士も商品経済から利益を引き出すべきだと勧めるわけであるが、それは、具体的には、次のようなものだった。「今の経済には、領主より金を出して、国の土産、諸々の貨物を、ことごとく買い取りて、そこにて買うものあらば売るべし。然らずは、船に載せ馬に駄して、江戸・京・大坂に運びて売るべし。」<sup>23)</sup> ここに提起されているのは、当時盛んになりつ

つあった藩営商業の推進であり、だから春台の説は、海保青陵の「一藩重商主義論」<sup>24)</sup>に連なるものだと見てよい。したがって、「徂徠から青陵を眺めるとき、その中継点にいるのが春台である」<sup>25)</sup>という位置付けにもなるわけである。

## 第2節 林子平の海防的農兵論

### 1

林子平は、元文3年(1738年)、旗本の次男として江戸に生まれた。<sup>26)</sup>父岡村良通は、幕府に小納戸衆兼書物奉行として仕え、600石余りを食んでいた。子平が3歳のとき、父は咎めを受けて(傷害事件を起こしたためとも言われる)浪人となり、江戸を去った。このとき以来、母を含む子平の一家は、子平から見て父方の叔父に当たる、町医林通明の扶養を受けることになり、子平たち兄弟姉妹は、通明の養子となった。

子平が6歳のとき、12歳の姉奈保が、仙台藩主を隠居した伊達吉村の江戸屋敷に、侍女として上がった。奈保は、やがて吉村の眼鏡にかない、16歳で藩主伊達宗村の側室となった。こうした関係で、叔父通明は、仙台藩から禄を受けることになる。そして、子平が15歳のとき、通明が世を去ると、2歳年長の兄嘉善〔よしたる〕が、通明の後継者として仙台藩に出仕した。通明の死去を機に、父が江戸に戻り、それまで自身がおろそかにしていた子平たち兄弟の訓育を、厳しく行なったという。父は、荻生徂徠の学を信奉した人と伝えられ、子平の経世論に徂徠学の影響が色濃いのも、父に由来するものかも知れない。

仙台藩より知行150石を与えられた兄嘉善は、子平が20歳のとき、一家を引き連れて仙台に移住した。子平は、直接仙台藩に仕えたわけではなかったから、比較的自由的な立場だった。28歳のとき、藩政改革についての

意見書を執筆。これは、子平が藩政について記した『上書三篇』のうちの『第一上書』をなすもので、子平の経世論の基本線は、すでにこの『第一上書』に表明されている。

その後子平は、仙台藩に登用されることもなく、江戸に長期滞在したり、長崎に再三旅行したりして、見聞を広めた。蝦夷地に出向いたという説もある。子平は、健脚の人で、食事や宿所に意を用いず、下駄ばきで気軽に旅をしたという。一方、乗馬をはじめとして、武術もよくしたらしい。長崎滞在の折には、徒党をなして乱暴を働いた唐人を鎮圧するリーダーの役を果たした、というエピソードがある。

子平は、長崎の地で、オランダ商館長フェイトの知遇を受け、フェイトから海外についての知識、特にロシアの南下についての知識を獲得した。これを契機に、子平は、日本を取り巻く世界情勢に関心を深め、また、そうした世界情勢に対する日本の態勢の遅れを痛感するようになった。こうして成立したのが、『三国通覧図説』と『海国兵談』である。

『三国通覧図説』は、蝦夷や朝鮮などの地図を中心とした著作で、1786年、子平49歳のとき、江戸で刊行された。『海国兵談』の方は、草稿は『三国通覧図説』刊行の年にできていたが、刊行は大幅に遅れた。それは、この書が、幕府の海防の不備を指摘することを主眼としたもので、幕府の制裁を誘発しかねず、この書の刊行を引き受ける版元がなかったからである。そこで、子平は、出資金を募り、予約出版の形で『海国兵談』を世に出すことにした。なかなか資金が集まらなかったこともあって、『海国兵談』は、やっと1791年、子平54歳の春、仙台で刊行された。

ところが、かねてから恐れていた通り、『海国兵談』の出版は、幕府の制裁を誘発した。『海国兵談』が出版された年の冬には、子平は幕府に召喚され、翌1792年の夏には、仙台の兄の家への蟄居と、版木の没収が命ぜられた。処罰の理由は、根拠なき奇怪異説をなしたというものであったが、その本意は、幕府の政治を批判し、また、たとえば具体的に江戸湾の海防の

現実をさらけだした，という点にこそあった。

蟄居の子平は，一步も戸外に出ず，謹慎に努めたが，その胸中は，「親もなし妻なし子なし版木なし金もなければ死にたくもなし」という，索漠としたものだった。子平は，蟄居後わずか1年で世を去っている。子平が蟄居を命ぜられたその年の秋，ロシアからラックスマンが根室に来るなどして，わが国の海防問題が焦眉の急を告げ，幕府もこれに対応せざるをえなくなるのであるから，皮肉な話であった。

## 2

林子平の経世論は，最初の著作『第一上書』から，最後の著作『海国兵談』まで，その性格をまったくと言っていいほど変えていない。子平の場合も，その中核概念は，経世済民であった。子平は，『海国兵談』の中で，次のように述べている。「天下国家に主たる人は，経済の術を知るべし。それ経済とは経邦済世とて，経は筋道の事，邦は国なり。国に筋道を付くるを経邦と云うなり。〔・・・〕世の中の人の，すまい易き様に世話するを済世と云うなり。〔・・・〕土風奢りて武備弛む時は，奢りを抑えて，武術を引き立てる様に世話いたし，或いは米穀の貴賤常に過ぐる時は，その値常に復する様になし，或いは士大夫貧窮すれば富ます様になし，或いは商賈の利強ければ，その利を抑えて，利権を奪い，或いは地の利を尽くし，または工商の利を取り立てて国を富ます様にすることなど，みな世の中の人のすまい易き様に，世話する事にて，済の持ち前なり。<sup>27)</sup>」

ここには，子平の経世論の性格の，ほとんどすべてが表現されていると言ってよい。まず，「経邦済世」がその実，経邦済士であること。次いで，「米穀の貴賤」が政治でコントロールされうると考えており，経済が政治に従属するかのよう理解していること。また，奢侈をいましてのこと。抑商的であること。「地の利を尽くし」と，特産物の生産を奨励するこ

と。「工商の利を取り立て」と、藩営の商業を推奨すること。これらの多くは、荻生徂徠に由来するものであろうし、またいくつかは太宰春台に由来するものであろう。子平の子平たるゆえんは、これら経世論のパーツのそれぞれが、富国強兵に収斂する関係になるところにある。つまり、経世論の究極の課題は、子平の場合、武備の強化であり、『海国兵談』の段階では、もちろん海防であった。

しかしながら、武備の強化それ自体は、『第一上書』でも最重要課題であった。『第一上書』は、「学政」、「武備」、「制度」、「法令」、「賞罰」、「地利」、「儉約」、「章服」、「雑」という9つの篇から成るが、その中で最も長文なのが「武備」の篇なのである。「武備」の篇冒頭では、子平はこう述べている。「武備と申し候は武道の心掛け用心にて御座候。治世にも乱を忘れ申さず候は聖人の誠にて、いにしえは和漢共に武備を盛んに致し候を手柄にしたる事にて御座候。然るに近年は武道はなはだ粗略にあいなりて、当時日本には武備と申し候もの無きも同然にまかりなり候。そのわけは武士皆大禄にあいなり、その上ことごとく城下詰めにて居候ゆえ、いつとなく上品にあいなり、次第に奢侈に長じ候て、皆弱手になり候て、公家などの様にまかりなり候。<sup>28)</sup>」

このような嘆きが、子平に農兵の主張をさせることになる。上の叙述の少し後では、子平はこう言うのである。「士の城下に住居致し候は、大いに武備の衰えとあいなり候事にて御座候。その品〔しな、理由〕は上にも申し上げ候通り、城下詰めにて居候えば、自然に奢侈花麗にあいなり、衣服・飲食の費え多くこれ有り候ゆえ、面々の禄をば皆商人に吸い取られ候て窮迫し候ゆえ、中々武備など心掛くべき様は御座無く、却ってただ今まで所持の武器をも売りしろなして用ゆる体にまかりなり候ば、城下詰めにて居候害にて御座候。然るゆえに士をば在郷にさし置き候事、武備の首意にて御座候。<sup>29)</sup>」

だから、子平の農兵論の主眼は、武備の強化にこそあるのであって、武

士の窮乏からの救済は、副次的な要素にとどまるのである。この意味で、子平の農兵論は、荻生徂徠の農兵論をたぶん手本にしながらも、熊沢蕃山の農兵論にまで、先祖返りする要素を持っていたと見てよい。すなわち、子平の場合、経済を論じながら、焦点が経済に定まらずに、とかく、古めかしい理想的な武士像の追求に、論がずれていってしまうのである。

とは言え、子平の農兵論の強い抑商性は、やはり徂徠の影響によるものであろう。子平の「禄をば皆商人に吸い取られ」という言葉は、徂徠の「武士の知行はみな商人に吸い取らるなり<sup>30)</sup>」という言葉に酷似している。そして、徂徠の「商人は不定なる渡世をする者ゆえ〔・・・〕商人の潰るることをば嘗てかもうまじきなり<sup>31)</sup>」を彷彿とさせるのが、子平の次の発言である。「町人と申し候者はただ諸士の禄を吸い取り候ばかりにて、外に益なき者にてこれ有り候。実に無用の穀つぶしにてこれ有り候〔・・・〕<sup>32)</sup>」

### 3

だが、子平の時代に、徂徠の農兵論を祖述するだけで事足りるわけでないことは、言うまでもない。そこで、子平は、農兵の主張と折衷する形で、藩営商業等について論ずることになる。『第一上書』では、まず、藩の財政難を緩和するという見地から、次のように他藩からの輸入の制限策が提起される。「諸商い物を他国より仕込み候事あい禁ぜられるべく候。薬種・書物などの如く、世上に無くて叶わ申さずものにて御国にて出来致さず物は、格別の事にてこれ有り候えども、当時は無益の器物・食物類まで、他国仕込みにし候。この事は御城下・在々共にあい禁ぜらるべく候。他国へ物を売り出し候と、他国より物を買入れ候と、出入りの間に大いに国の損益有る事にて御座候。<sup>33)</sup>」

そして、他藩に輸出しうる特産物の生産が奨励される。子平によれば、特産物の輸出で最も成功しているのは、薩摩藩である。琉球表や黒砂糖は



日本中に輸出され、また、布類、瀬戸物類、草木など、薩摩藩の輸出品目は多様である。薩摩以外では、備前や備中の瀬戸物や畳表、四国の鯨や藍玉、等々がある。それらに引き比べ、と子平は言う。仙台藩は大国であるのに、他国に輸出するべき特産物がほとんどない。だから、輸出が少ない割りに輸入が多く、藩財政が苦しいのだ。こうして、子平は、特産物の生産を奨励して、次のように言うことになる。

「とかく土産の多きは国の益となり、土産の無きは国の損にて御座候。その品は、土産を取りて他国へ廻し候時は他国の金銀手前へ入り申し候。また諸物を他国より買い入れ候時は、手前の金銀皆他国にぬけ出申すべく候。当時御国は諸物大半他国より仕込み候ゆえ、御国中の金銀皆他所へ出申し候。よって土産を多く御仕立てなり置きせられ候て、他の金銀御国へ入り候様に、なり置きせらるべく候。<sup>34)</sup>」もちろん、商人を敵視する子平にとって、「土産」を輸出する主体は商人ではありえず、藩政府ということになり、だから、ここでイメージされているのは、藩営商業に他ならないことになる。

このようにして、子平は、太宰春台とほぼ同様の、重商主義への接近を示すのである。それは、本庄栄治郎氏がつとに指摘しておられるように、「日本国内限りのことではあるが、メルカンチリズムの思想と類するもの<sup>35)</sup>」と言ってよい。

ただ、子平の場合、こうした藩営商業が、富国強兵、武備の強化に、奉仕する関係になるわけである。再び本庄氏の言葉を借りれば、「子平の説ける産業興隆の思想は、それ自身が最後の目的ではなく、武備のための富国論であった<sup>36)</sup>」のである。

そうした点は、『第一上書』でも、『海国兵談』でも、まったく変化していない。今一度『海国兵談』に目を転ずると、次の記述がある。「南の地は〔・・・〕産物も多くして、金穀の収納多きゆえ、国家の経済致し易し。〔・・・〕北の地は〔・・・〕産物も少なくして金穀の収納少なきゆえ、

国主も貧乏し易く、諸士も貧乏し易し。上下貧乏すれば、上下の武備弛むなり。寒地を領する人、よくよく心を用いるべし。〔・・・〕国産を多くしつけ、国用をも足し、通商をも多くして、宝貨を賑わす様にする事なり。<sup>37)</sup>このように、子平の経世論の究極の課題は、あくまでも武備の強化にあった。『海国兵談』の段階での子平にとって、経世論は、海防論の一環に過ぎないのである。塚谷晃弘氏の言われるように、「子平の本質は〔・・・〕『海防論者』であった<sup>38)</sup>」ということになる。

問題は、子平においては、重商主義への接近が、農兵論の放棄を帰結しないという点にある。太宰春台の場合、重商主義への接近は、抑商から容商への移行を意味したから、それは当然に、農兵論の放棄につながったわけである。ところが、子平の場合、重商主義への接近が、武備の強化の手段としてしか把握されないために、商品経済への理解が伴わず、農兵論との奇妙な併存を許してしまうのである。

『海国兵談』の段階でもなお、農兵論は健在であった。子平は言う。「さて人を多くするも強くするも、武士を土着せしむるにあり。武士土着すれば奢侈なし。奢侈なきゆえ貧困せず。貧困せざるゆえ、禄に応じて譜代の家の子、並びに武具、馬具等、心掛け次第、所持せらるるなり。その上に武士土着すれば、山林にては鳥獣を狩り、水辺にては漁獲し、また平生、馬に乗りて馳駆するゆえ、自然と馬術にも達し、また遠方の人と互いに往来するゆえ、山川の悪路にも習い、筋肉形体勇壮になるゆえ、真の武士と云うべし。」<sup>39)</sup>ここでも、子平の論は、経済という焦点を見失い、いにしえの理想の武士像を追求することに流れてしまう。

このように、重商主義に接近しながら、農兵論を捨てないところに、子平の経世論の際立った特徴がある。子平においては、経世論の究極目標は、武備の強化や海防であり、農兵制度も藩営商業も、等しくこの目標に達する手段と了解されている。つまり、子平の視野には、これら手段相互の整合という問題が入っていないのである。それは、子平が重商主義に接

近しながらも、重商主義自体をよく理解していなかったことの表明であろう。言い換えるなら、子平は、重商主義をよく理解しないからこそ、農兵の主張に固執し、かつ重商主義に接近しえたのである。

## おわりに

太宰春台は、貴穀賤金や農本商末といった尚農の原則に立ちながらも、復古主義的な農兵論に与することを回避して、重商主義に接近することができた。それは、経済認識の革新を志向していた春台にとって、尚農の原則が、もはや絶対的なものではなく、より柔軟に把握されていたおかげであった。春台の経世論は、だから、農兵論から重商主義論への移行の、ないしは、抑商から容商への移行の、典型をなすものと理解してよい。

これに対して、林子平は、復古主義的な農兵論を固持しつつ、それでもなお重商主義に接近するという、奇妙な折衷に陥った。それは、子平にとって、経世論の目標が武備の強化や海防にあり、そうした目標に役立つとみなされる限りにおいて、農兵制度も重商政策も、変わるところがなかったからである。それは、同時に、子平の経世論では、経済が論じられながらも、焦点が経済に定まっていないことを意味した。子平の場合、古い理想的な武士像の追求と、最新の知識に基づく海防の必要と、両者が、経済と遊離した地点で結合するのである。

とは言え、子平の意識の上ではともかく、重商主義への接近がなされる以上、春台の場合のように典型的ではないにせよ、子平の場合も、経済思想の移行はなされつつあったと言ってよい。子平の農兵の主張には、海防を達成するためには、何よりもまず武力を高めねばならないという、軍事技術的な面が大きかったように思われる。だから、復古主義的な語り口を大幅に割り引いて考えれば、子平の農兵論には、後の明治政府の富国強兵策に通ずるものがあることになる。

それゆえ、春台の容商的尚農論はもちろんであるが、子平の海防的農兵論も、農兵論の転回をなすものと位置付けてよい。元来、農兵論の論理構造は、重商主義論に似ている。武士の農業への従事を主張するのが、江戸期の農兵論であるとするれば、武士の商業への従事を主張するのが、江戸期の重商主義論である。だから、農兵論は、重商主義論に容易に移行しうるわけである。子平の経世論に、農兵論への固執と、重商主義への接近と、ふたつながら併存しうるのも、おそらくは同じ理由による。

逆に言えば、春台や子平を転回点として、農兵論が衰退し、重商主義論が台頭するとしても、その変革は、思想の本質的な変化を伴わないで、なされた可能性が高いということにもなる。つまり、農兵論から重商主義論への移行は、文字通り移行に過ぎず、たとえば、思想革命といった言葉には、なじまない性質のものだったであろうということである。こうした点は、江戸期の農兵論や重商主義論が評価される際に、もっと注意されてよい。そして、あるいはその点は、明治以降のわが国経済思想を取り扱う場合にも、まるで無関係ではないかも知れないのである。

- 注 1) 熊沢蕃山と荻生徂徠については、折原裕「江戸期における農兵論の系譜——熊沢蕃山と荻生徂徠——」（『敬愛大学研究論集』第47号，1995年3月）を、海保青陵と本多利明については、折原裕「江戸期における重商主義論の成立——海保青陵と本多利明——」（『敬愛大学研究論集』第43号，1993年3月）を、佐藤信淵と横井小楠については、折原裕「江戸期における重商主義論の展開——佐藤信淵と横井小楠——」（『敬愛大学研究論集』第44号，1993年9月）を、参照。
- 2) この項の記述は、武部善人氏著『太宰春台・転換期の経済思想』（御茶の水書房，1991年）に、また、尾藤正英氏稿「太宰春台の人と思想」（『日本思想大系』第37巻，岩波書店，1972年）に、多くを負っている。
- 3) 太宰春台『経済録』（『日本思想大系』第37巻）16頁。
- 4) 同上，20頁。
- 5) 同上，22頁。
- 6) 同上，22頁。
- 7) 同上，23頁。

- 8) 同上, 23頁。
- 9) 同上, 24頁。
- 10) 同上, 24頁。
- 11) 同上, 24頁。
- 12) 同上, 24～25頁。
- 13) 同上, 26頁。
- 14) 小島康敬『徂徠学と反徂徠』（ぺりかん社, 1994年）89頁。
- 15) 太宰春台『経済録』（『太宰春台集』, 誠文堂新光社, 1935年）122～123頁。
- 16) 同上, 124頁。
- 17) 太宰春台『経済録拾遺』（『日本思想大系』第37巻）45頁。
- 18) 渡邊興五郎『日本経済思想史——太宰春台の研究——』（文化書房博文社, 1971年）128頁。
- 19) 太宰春台『経済録拾遺』47頁。
- 20) 荻生徂徠『政談』（『日本思想大系』第36巻, 岩波書店, 1973年）317頁。
- 21) ちなみに, 武部善人氏は, 春台の経済論を, 「日本経済思想史上で最初になされた, 重農主義的経済思想から重商主義的経済思想への転換の槓杆」（武部, 上掲, 320頁）と表現され, また, 渡邊興五郎氏は, 「春台は農業マーカンティストとみることが出来る」（渡邊, 上掲, 130頁）と表現されている。
- 22) 折原裕「江戸期における農兵論の系譜」を参照。
- 23) 太宰春台『経済録拾遺』49頁。
- 24) 折原裕「江戸期における重商主義論の成立」を参照。
- 25) 小島康敬, 上掲, 83頁。
- 26) この項の記述は, 平重道氏著『林子平・その人と思想』（『仙台藩の歴史』第4巻, 宝文堂, 1977年）に多くを負っている。
- 27) 林子平『海国兵談』（岩波文庫, 1939年）252頁。
- 28) 林子平『第一上書』（『日本思想大系』第38巻, 岩波書店, 1976年）218頁。
- 29) 同上, 218頁。
- 30) 荻生徂徠『政談』306頁。
- 31) 同上, 345頁。
- 32) 林子平『第一上書』226頁。
- 33) 同上, 199頁。
- 34) 同上, 202～203頁。
- 35) 本庄栄治郎『日本経済思想史研究（下）』（日本評論社, 1966年）47頁。
- 36) 同上, 53頁。

- 37) 林子平『海国兵談』247頁。
- 38) 塚谷晃弘「幕末近代思想の系譜（二）——子平と利明を中心に——」  
（『国学院経済学』第18巻第2号，1970年1月）71頁。
- 39) 林子平『海国兵談』240頁。